

【仮訳】

「第三の転換：人類の一体化と私たちの傷を癒す長い旅路」

ノートルダム大学 名誉教授

ジョン・ポール・レデラック

2019年5月8日

この度、このような素晴らしい表彰の機会をいただき、信仰に命を受けた平和構築者たちへ賛辞と、諸宗教協力に向けた庭野平和財団の真摯な取り組みに対し、深い感謝の意を表したいと思います。

約40年にわたって、私は紛争地と呼ばれる場所で活動してきました。人間の苦悩が常に存在している一方で、勇気と思いやりの心を持った人々は、必ず良き変化がもたらされると確信し、忍耐強く希望を胸に抱き続けていました。

コロンビアのメディオ・マグダレナやモンテ・デ・マリアで私が目にしたのは、戦闘が続くさなかにあっても、対話に取り組むことで暴力を越え、平和地帯を作り出そうとしている地域の人々の姿でした。

ケニアのワジールでは、誰もが安全に売買の場として利用できる市場を地元につくろうと、心に決めた女性たちがいました。彼女たちが起こした行動は、それまでなかった相互協力のネットワークをつくり上げ、その土地で起きていた紛争を終結させました。

またネパールでは、あらゆるカーストや民族的背景を持つ人々が彼らの土地にある森林と水源を共有し、保護することを決め、地域全体の対話に向けて慎重な準備を重ねました。このことで10年もの間続いていた暴力的な紛争を終結させました。

こうした人々は、暴力的な人々の内なる人間性に目を向け、地域の資源を他者と共有することを選んだ人たちでした。彼らはあらゆる困難を生き抜くための革新的な智慧をもった先駆者です。

これまでの平和に関する学術研究と平和構築の実践を振り返ると、歴史的な転換が二度あったことが分かります。

最初の転換は、20世紀の世界大戦の時代に起きています。平和学が誕生し、戦争がどのように発生するのか、国際秩序はどうすれば国家間紛争を防止できるか、そして国家間協力をどのようにして促進するか、ということについて研究が始まりました。

ソビエト連邦が崩壊し、国内武力紛争が拡散するに伴い、私たちの平和構築の戦略は拡大しました。この第二の転換により、内戦と国内の和平プロセスに、次第に大きな重点が置かれるようになりました。私たちは、平和が持続的に広がることによって、人々の

認識が地域の活動に向いていくことを少しずつ学びました。平和に向けた実践が拡大することによって、重層的で持続的な対話、何代もの世代間のトラウマ、修復かつ回復可能な正義、社会的癒やしや和解などに関わる課題に直面するようになりました。

そして 2019 年、私たちは平和構築における第三の転換を目の当たりにしています。

国家間における国際秩序の問題が二つの世界大戦を引き起こしたのが 20 世紀初頭の四半世紀とするならば、今世紀初頭の四半世紀は、人類の生き残りに向けた探求が明らかになったと言えるでしょう。私たちは脆弱な地球にどう向き合えば良いのでしょうか。大量の人口が移動する時代に、私たちは「帰属」という人間の基本的な権利にどう取り組めば良いのでしょうか。そして深刻な分断をもたらすとともに、恐怖による操作と排他的な統制をもくろむ権威主義的な扇動に直面する中で、人間の尊厳に資する生活が保たれる地球規模での政治体制を、私たちはどう模索したら良いのでしょうか。

私が信仰するメノナイトという教えの名前の由来になったメノ・シモンズは、1539 年、著書の中で「信仰とは、人々の苦しみに対する私たちの行動を求めるもの」であり、それは「空腹な人に食べ物を与え、他を傷つけるものに対し善を行い、そして傷口を縫い合わせる」と記しています。その数世紀後に、デズモンド・ツツ師は「私の人間性はあなたの人間性と固く縫い合わされている。なぜなら、私たちは共にあればこそ人間たり得るからである」と述べています。

今日、私たち世界家族は深い傷を負い、かつ傷ついた惑星に生きています。

こうした傷を乗り越え生き続けるために、癒やしと、尊厳によって導かれる地についての平和倫理が必要なのです。

地についての倫理とは、私たち自身が地球家族として、深い相互依存の関係にあるべきことを知らしめます。私たちの子孫から未来を奪い去るようなシステムから脱却し、社会的勇気や慈悲に満ちた回復力を潤す癒やしの井戸の水をくみ上げるよう、私たちはいざなわれています。私たちは今、豊かな多様性に彩られた人間性という名の資源を集結させなければなりません。

「地球的」人間性

暴力を生き抜いた地域コミュニティ、すなわち癒やしの変化をもたらした先駆者たちに共通しているものは何か。それは、彼らが「自身の敵をも含めた人間関係の網の目の中に、自らもいること」を知っているということです。

コロンビアのあるグループは、このことを「私たちには敵という存在はない」という言葉で表現し、また南スーダンの青年たちのグループは、「私たちは一人の母をもつ 64 の部族である」と表現しています。分裂をはるかに超えたところに存在する、すべての人に共通する人間性を観ようとするとき、そうした想像力は開かれていきます。彼らは無限の愛と境界線のない親密な関係性を築くことによって、人類を一つにする方法を発見したのです。

霊性や宗教の起源となる物語の中に、とりわけ地域古来の智慧の中に、同様な精神の働

きを見ることができます。生命や創造物の脆弱な美に向けられる感謝と畏敬の念からは、謙虚さや思いやり、愛が生まれます。そしてまた、「自分が他にしてほしいことを、自らも他に対して行わなければならない」という、明確な倫理も示されてくるのです。

ローマ教皇ベネディクトの言葉にあるように、この倫理は、私たちが再び人間性を取り戻す経路として、また私たちに共通する人間性に触れる能力として、「心の耳を傾ける」よう私たちがいざないます。コロンビアのメディオ・マグダレナに暮らす私の友人は、「自分たちを理解してくれない人たちを、こちらから理解するよう努めよう」と言います。

メノナイトの伝統には、「信仰とは、言葉よりも、奉仕や慈悲、そして愛を実践する生き方を選択すること」という教えがあります。メノナイトの教えの実践においては、私たちが傷つけようとたくらむ人たちを含めた他者にどう向き合い、手を差し伸べられるかという点に、人類に向けられた神の愛の特質が最も明確に示されると教えています。

信仰の深奥から湧き起こる志は、障害や境界を越えて歩みを進めていくためのインスピレーションを私に与えてくれました。人類へ向けられた、境界線のない、広大で大胆不敵な神の愛は、多様性の恵みに気づき、そこから学ぶこと、互いの傷を越えて今まで不可能と思われた永遠の友情を築くこと、そして自分たちとは意見が合わない人たちを恐れずに理解しようと努めることへと、私たちを駆り立てます。違いや対立の真ただ中にいるとき、私は他の人を裁くのではなく、課題に向き合い暴力に代わる方法を共に探すようになっていました。

こうしたことへの理解は、宗教協力に取り組む智慧を与えてくれます。なぜなら、そこには地球に根ざした平和構築を考える精神的資質が存在するからです。私たちににとって最も重要な課題は、境界や限界を超えて考え、行動することなのです。

障壁を設けても、伝染病の蔓延や人間による生態系や気候の破壊を止める力がないことは明らかです。国境には、生活の安寧や帰属を求めて移動する人たちが抱える問題に対処できるような力はほとんどありません。国境は、アイデアや、リアルタイムで交わされるコミュニケーション、科学技術の流れを止められないばかりか、収奪的な世界経済の流れを止めることも不可能です。国境線だけでは、絶え間ない武器、麻薬そして人身取引の流れを阻止できないことは証明済みのことでもあります。

今日分断化された世界には、苦しみを抱えている人や、生活の場を追われた人たちがあふれています。私たちに求められるのは、紛争や恐怖の中であっても、人間らしさを取り戻し、地にしっかり根を張って互いが強い絆で結ばれるために必要な資源です。

今、この惑星では、いかなる国も、外国の最も弱い立場にある人たちの幸せを等しく考慮することなしには、自国民の幸せを保証することはできません。

こうした課題に立ち向かうために、思いやりと勇気に満ちた社会をつくりあげることが必要です。そのためには、多様な人間関係に対応しながら、互いの平等性と尊厳性を保証し、(精神的な)奥深くにある力を粘り強く育てなければなりません。それこそが、真の意味で私たちの傷口を縫い合わせ、帰属の権利を実現し、人類として団結する道なのです。

癒やしの泉を湧き出させる

ノーベル賞を受賞した北アイルランドの詩人、シェイマス・ヒーニーは、著書『The Cure at Troy (訳：トロイの癒やし)』に次の驚くべき詩を残しています：

ゆえに復讐のはるか向こう側で
大いなる変化が起きることを望め
さらに遠くの岸に
ここから到達できることを信じよ
奇跡を信じ
治療と癒やしの泉を信じよ

暴力的な対立のただなかでも、復讐の向こう側を目指し、道を切り開いていく驚くべき人々の存在を、私は常に目の当たりにしていました。個人的なレベルでは、知的かつ専門的なスキルは、心の準備を切り離し得ないことも理解していました。危害を永続化させている構造を変革するには、尊厳ある人間関係を築く必要があります。その関係の質は、私たちの内面的な営みの質に密接に結びついているのです

どのような姿を示すかが大切

諸宗教の人たちとの交流や霊的な智慧からの学びを通して、時間の流れとともに、私は自分のメノナイトの信仰が深まり、使命感も増していることに気づきました。日本でのまとまった滞在は今回が初めてですが、私はこれまで「俳聖」と呼ばれ、人々に親しまれてきた松尾芭蕉の俳句や俳文に大いに感銘を受けてきました。私の経験のなかから、諸宗教間に存在する宝物についてお話ししたいと思います。

まず、芭蕉と彼の弟子の一人であった宝井其角の会話から始めます。ある朝、野原を散歩した其角は俳句を詠みます。

あかとんぼ
はねをとったら
とうがらし

すると芭蕉は応えます。「これは俳句ではない。お前はとんぼを殺してしまった。俳句は命を与えるもの。俳句とはこういうものだ」と。

とうがらし
はねをつけたら
あかとんぼ

私は芭蕉の『奥の細道』の俳文から、日々の旅の中に組み込まれた「間」を学びました。俳句のシンプルな構造の中に、内面を癒やし外界に向けて表現する力の源があることが、体験を通して徐々に理解できるようになりました。私にとって俳句は、日々の生活における平和の実践となっているのです。

私は今、大学の学生たちに俳句を教えています。私は学生たちと教室を出て、大学のキャンパスを散策します。そして、「自然との直に触れ合う体験」「人間の感性と精神」、そ

して「俳句という創造的な行為との間に介在する複雑な関係」について探求します。その三つの要素はすべて、平和構築に携わる者に、平和を織りなす長い旅路に命を吹き込むものです。

俳句は、私に五感の全てを使った気づきを与えました。あらゆる瞬間において気づきの実践ができるようになりました。

俳句によって、私は美しさに感動し、偉大なものに対して開かれた心でいる実践ができるようになりました。

俳句は、その瞬間にある複雑さを最もシンプルな形で捉えることを私に求めました。謙虚に、物事の本質をより深く求め続けることができるようになりました。

俳句は彷徨（さまよい）と感動に私をいざない、子供のように純粋な好奇心を私に与えてくれました。

俳句は、私に遊び心を持たせてくれました。そして、創造的で、とらわれのない思考を可能にしてくれました。

また俳句は、私の内なる詩人に、まだ名前もついていない経験の記憶を呼び起こさせました。言い表しようのないものからあえて声を発する訓練ができるようになりました。

芭蕉は晩年に、「私は生涯に五つか六つしか句を詠んでいない」と言ったことが伝えられています。数千もの俳句を残した芭蕉ですので、それはまさに意外な言葉です。「奥の細道」の俳文には、「奥」が自身の内奥へ向かうものであったことを示す、現実に根差しながらも深い精神性に富んだ二つの解釈が記されています。

まず、「奥」は芭蕉が旅をしたこの素晴らしい国の奥地への道を象徴しています。芭蕉が試みたのは、旅で訪れた地に暮らす人々やその土地の歴史の中に息づく精神、その土地が持つ智慧に深い関心を寄せ、表すことでした。

次に、芭蕉にとって「奥」とは、内なる広大な精神世界に向かって、揺るぎなく勇敢な旅を続けること、この世界に居場所を探し求めること、そして、帰属することへの憧れを暗示しています。

『奥の細道』の冒頭に、芭蕉は「旅を住処とす」と記しています。旅とは「住処」の探求であり、住処とは、「奥」が意味する内面への旅が確固とした全体性の中に統合された場所のことです。そこは、共有の場所であると同時に、帰属が許される場所でもあるのです。

これが、私が芭蕉から頂いた癒やしの泉です。私たちの長い旅路は、人類共通の住処を築くための旅ですが、日々の生活では、「間」があり、喜びや静かな時間もあるのです。

私たちの美しき人間性の完全な豊かさ

最後に一つの提言をさせて頂きたいと思います。多様性がもたらす恩恵を結集することができなければ、私たちが複合的な地球のその脆弱さに対応することは不可能です。

暴力を乗り越えた地域社会から私が学んだのは、平和構築とは一人の人間の問題ではなく、いかにして社会全体が一体化し、共に立ち上がって課題に取り組むかである、ということでした。こうした地域社会は、動員できる全ての人的資源を大切にし、公平性を尊重しながら予想外の協力関係を築き、困難を生き延びた者の直感的で鋭い洞察力に導かれていました。そして勇敢で、困難から立ち上がる力を持った青年や女性たちのリーダーシップを認め、それに従うことによって、数々の革新がもたらされてきたのです。

もし平和構築が、生存に関わることを取り扱う際は、私たちの行動の全てがシンプルな50対50の原則に沿ったものでなければならないと、私は確信します。それは、決定権を持つ指導者の50%が40歳未満の青年であること、50%が女性であること、という原則です。

ネパールで森林保護に取り組む「森林利用者グループ連盟」という小規模な団体が、この原則を採用し、すべてのグループにおいて、決定権を持つ指導者の男女比が50対50となるよう求めました。ほんの一握りの人数から始まった連盟でしたが、今や数百万人が加盟する全国的なネットワークへと成長を遂げ、組織のあらゆるレベルの活動にこの原則が適用されています。また、ケニアでは「ワジールの女性たち」という名称の団体が、明晰で実務の才気にあふれた女性たちの活動によって、北東ケニアの長年にわたる暴力の構造を変容しました。そして、コロンビアの「ルタ・パシフィカ・デ・ムジェレス」という団体の女性たちは、「平和のための女性の行進」と称する卓越した活動を通して、人々の声、記憶、そして希望を結集し、地域社会と国民的合意に大きな影響を与えました。

青年たちにも同じことが言えます。人類の歴史における最も重要な動きと発展のいくつかには、共通の驚くべき事実があることに、私は注目しています。マーティン・ルーサー・キング・ジュニアが、かの有名な「私には夢がある」という演説をしたのは、彼が34歳のときでした。女性平和運動家のレイマ・ボウィは30代前半のときに「平和のための女性リベリア大衆行動」を共同で主導し、第二次リベリア内戦の終結に貢献しました。また忘れてはならないのは、私たちの宗教伝統についても関係があります。キリスト教を生んだイエス・キリストの宣教は、彼が30歳のときに始まりました。そしてブッダ（釈尊）は30代半ばで悟りを開いたと言われています。

こうした事例に見られる驚くべき転換は、私が「あいだの智慧」（世代間の智慧）と呼んでいるものから生まれてきました。非常に多様な人たちが他の人たちの声に大いに耳を傾け、互いに励まし合い、勇気ある行動に共に身を投じることによって、世代を超えた協力体制が築かれ、これまでにはなかったひらめきと飛躍的な進歩への突破口が現れたのです。

ただ数だけを合わせるような取り組み方では、50対50の指標に到達することはできません。私たちは、豊かな創造の恩恵と、旅路を歩む美しき人間性を互いに引き出し、集結させなくてはなりません。なぜなら、私たちそれぞれの可能性の全てを持続的に結集させることによってのみ、私たちは今世紀の課題に立ち向かい、乗り越えていく道を見いだすことができるからです。

終わりに

今日、“橋”の代わりに“壁”をつくることを良しとする政治を、さらに恐れに突き動かされ、憎悪に根ざした排他的な政治の台頭を、私たちは目の当たりにしています。しかし、恐怖心を転換できるのは愛だけです。私たちは、共通の人間性に気づき、仲間意識に目覚めることによってのみ、人々を分断する深い溝に橋をかけるために必要な創造力と勇気を発揮することができるのです。

私たちは、世界の安全保障が壁の高さや武器の量によって決められるのではなく、私たちの人間関係の質の中に存在するのだと確信する勇気を持たねばなりません。

ここで色あせることのない芭蕉の智慧を、最も有名な一句からご紹介します。

古池や
蛙飛びこむ
水の音

私たちはそこに、時代の変化を耐え抜いた智慧を感じます。

初心に宿る不思議な力を感じます。

より深く素直に聴こうと傾けられている「心の耳」の働きを感じます。

全きものの存在と癒やしを感じます。

人間精神を育む充足した美を呼吸するがごとくに感じます。

私たちに共有する人間性を感じます。

私たちは、このかけがえのない惑星に生を受けたことに感謝し、畏敬の念を有して謙虚になるからこそ、自らその恵みと優しさを求め、それを他のものに与えようとするのです。

改めて庭野平和財団に対し、心より感謝の意を表します。この表彰は、私たちの愛する地球家族が、憎しみと分断を超えて、真の癒やしをもたらす絆を醸成しようとする努力に対し、多大な励ましを与えてくださいました。

精霊の導きにより、将来世代の人々に癒やしと全体性の遺産を残すことができるのは、共に地に根を下ろした私たちだけである、その不動の信念を持って、これからも取り組んでまいります。